三河本苑だより

８月号
2021・8 №.471

（発行者）
大本三河本苑
〒443-0031
蒲郡市竹島町２８-５
TEL 0533-69-7518
FAX 0533-69-1455

６月月次祭

本苑長あいさつ

加藤三樹

先月５月５日みろく大祭に、「報身みろく神業の足跡」第３巻が発刊されました。事前に注文された方は、お手元に届いたと思います。その中に三河本苑に関する記述として、日出麿尊師さまの歌碑建立のお話がありました。そこで今回は、「報身みろく神業の足跡」の発刊と、尊師さま歌碑の建立に寄せる思いをお話しします。

まず１つ目の「報身みろく神業の足跡」の発刊に寄せる思いです。大本のご神業は、進展段階に応じて３つに分かれています。開祖さまの法身みろく神業、二代教主・聖師さまの応身みろく神業、そして三代教主、尊師さま以降の報身みろく神業です。法身みろく神業と応身みろく神業の歴史書は、大本開教６０年記念事業として発刊されました「大本７０年史」です。報身みろく神業の歴史書は、今回、開教１２０年記念事業として発刊されました「報身みろく神業の足跡」です。その中でも、第１巻、第２巻は三代教主さまのご足跡で、今回発刊されました第３巻は四代教主さまのご足跡です。今年ご就任２０年を迎えられました現教主さまのご足跡は、来年発刊予定の第４巻に掲載されます。

この様に、大本の開教以来のご神業の歴史は、「大本７０年史」と「報身みろく神業の足跡」第１巻から第４巻に全て書かれています。拝読させていただき、「**温故知新**」、**大本の歴史を今一度正しく学び、現代、報身みろく神業の道を歩む私たちの使命を深く心に刻みたいと思います。**

三河本苑のご神業の歴史については、本苑設立から２０年までは「三河本苑２０年記念誌」を、それ以降、来年迎える５０年までは、今作成中の「三河本苑５０年記念誌」を見ればわかります。来年発刊します５０年記念誌を楽しみにお待ちください。編集メンバーはプレッシャーを感じながらも、精一杯、努力しています。

次はお話ししたい２つ目、尊師さま歌碑の建立に寄せる思いです。「報身みろく神業の足跡」第３巻には、「聖師さまの歌碑は全国各地に多く残されていますが、尊師さまの歌碑は全国で３基だけで、報身みろく神業の時代の大事な足跡になっている。」と書かれています。３基の中の第１号が、昭和４９年、三河本苑に建てられた歌碑です。高須令三当時本苑長が「尊師さま喜寿ご慶祝に、是非、歌碑を建立させていただきたい。これが本苑信徒全員の念願です」と申し入れされ実現しました。第３巻に曰く、「朝陽館建設も、その発端は三河地方の信徒の言葉であった。歌碑建立も、三代教主・尊師さまに「**絶対の信**」を寄せる同地の信徒の思いが結集されたもの」と。当代の教主・教主補さまへの「絶対の信」と聞いて、三河本苑２０年記念誌に書かれていた三河本苑設立の旗頭の言葉、「**主一無適の信仰**」に込められた先人の思いを覚悟しました。「**現教主さまを通して、大神さまに信仰の誠をささげる**」、**本苑の先人のお方が築かれた道をしっかり踏み歩んでいきたいと思います。**

今回は、「報身みろく神業の足跡」発刊に寄せる思い、「**温故知新**、大本の歴史を正しく学び、報身みろく神業の道を正しく歩んで行きたい」、また尊師さま歌碑建立に寄せる思い、「三河本苑の先人の方々が築かれた道、**主一無適の信仰**をしっかり踏み歩んで行きたい」ことをお話ししました。

「言向け和す」とは

特任宣伝使　芝田豊海

霊界物語を拝読しますと、「言向け和す」というお言葉が幾度となく出てきます。

前回の「善言美詞」に続いて今回は、「言向け和す」について考えてみます。

「言向け和す（ことむけやわす）」とはどういう意味か？辞典を引いても「言向け和す」そのものは載っていませんが、「言向く」と「和す」について旺文社の古語辞典にはつぎのように

【言向く】そむいている者を説得する。服従させる。

【和す】やわらげる。平和にさせる。帰順させる。とあります。

「言向け和す」は古事記に出て来る古い大和言葉です。

『天照大御神が天孫（ニニギ）を高天原から地上に降臨させる時に「地上の荒ぶる神々を言向け和して一つに統一して治めなさい」という使命を与えた』とあります。武力による統一は、一時的・その場しのぎ的な解決に過ぎないのです。

●肯定の言霊、否定の言霊

「人をやわらげ睦（むつ）ましむるものは言霊である。

いくら言霊を用いたとて、決して減るものでも、損のいくものでないから、われわれは生涯のうちに、できるだけ多く善言美詞を使用して、その効果を発揮すべきである。

人間が人間を嫌うということは、ぜんぜん変態である。厭世家（えんせいか）、偏見哲学者などには、この類（たぐい）の人が往々あるが、これは心身のどこかに欠陥があるからです。

生が愉快であり、人がみな親友に見えるのが自然なのである。われわれは、大いに言霊の媒介によってお互いに睦び、愛し合うて行かねばならぬ。」

（『信仰覚書』第一巻P245）

●善言は善意を喚（よ）ぶ

「ほめられて怒る者はなく、けなされて喜ぶものはない。暴言悪語ほど人を後悔せしむるものはない。

お知らせ

◆八月月次祭は
八月二十二日です

皆さまには引き続き感染防止のご協力をお願いします

祭務部より

８月の行事

●２２日（日）に変更
本苑八月月次祭
・全体会議

●２１日（土）～２２日（日）
本部講師葬祭研修会
（中止）

９月の行事

●１９日（日）
本苑九月月次祭
・敬老会

●２６日（日）
宣伝使・宣伝使になるための研修会

たとえ大悪人にしたところで、その素質のどっかには神を宿している。善言美詞は、やがてその神を引き出してやることになるのだ。相応の理によって、善言は善意を喚び起こし、悪言は悪意を呼び起こすことになる。」
（『信仰覚書』第二巻P135）

●真の善言美詞である祝詞を
「『大本神諭』、『霊界物語』を毎日いただき、しっかりお腹にいれ、真の善言美詞である祝詞を清い言霊で日に何度も奏上させていただき、三千世界を祓い清め、世界中の人々がそろって幸福に暮らせる安心立命の世の中が一日も早く来ますように、ともに祈らせていただきたく存じます。」（『教主ご教示集 第一巻 出口紅五代教主』「開祖大祭ご挨拶」平成十五年十一月六日）

わたし自身、朝夕拝をしている中で、心がけていることがあります。それは、**「急がない」「焦せらない」「力まない」で祝詞に眼を寄せて祈ること**です。

そして、コロナ禍、自然破壊、紛争等、世界に起きていることが「大難が小難に」「小難が無難に」なります様に、**善言美詞をもって「言向け和す」ように祈りたいと思います。**

神の家日記

神の家建設委員会　河合恭久

神の家の新築工事も進み、現在基礎工事が終了して柱を組むための足場が組立てられ、いよいよ7月7日に手斧始祭（ちょうなはじめさい）、立柱祭をさせていただくようになりました。

また、役員、機関長様にご案内しましたように、7月24日（土）には上棟祭をさせていただきます。信徒の皆様にご出席いただくのが筋ですが、コロナ禍の中のためご遠慮くださいますようお願いいたします。

尚、完成した暁には皆様とお祝いしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

基礎工事（R3. 4. 9撮影）

基礎工事（R3. 5. 29撮影）

「私が朝食を摂らない訳（その1）」

三河豊田支部　杉山　孝

私たちは朝食をしっかり摂りなさいと、教えられてきたものですが、実はその歴史は浅いのです。一日三食という食習慣が始まったのは西洋で200年たらず、日本でも江戸時代後期、元禄のころからとされ、それまでは二食、昼と夜でした。いま調べると「昔は朝と夜の二食」を説く方もみえますが、なんの意図があるのやら。また、人間の体に本来不要な量の食事を取るようになってから、体に不具合が出るようになって来たようです。最近でこそ、その事実が明らかになりつつあり、粗食が見直されつつありますが、いろんな意味で朝食を摂れ、摂れと言われてきていたのです。

西洋ではドイツの栄養学の確立と共にエジソンの発明によりトースターが普及する頃と合致します。朝パンを普及することで、トースターを売るために販売業者が朝食必要論を提唱し始めたからです。日本でも事情は同様でした。玄米から白米が普及し始めた頃に合致するわけです。つまり、精米業者の思惑があったことは明白でしょう。

栄養学的にも、玄米に比べ、栄養価の低い白米は多く摂らなければなりませんでした。経済的に最も発展した元禄時代だから、そこそこ裕福な人も増えたことも背景にあるでしょう。

このようなことからも一日三食になった経緯は、恣意的なことだったわけです。

今ですら「朝食の大切さ」と称して農林水産省も朝食推進運動を展開しています。朝食の経済効果は1．5兆円にも上ります。つまり、「朝食抜き」が増えると、食品業界、薬品業界、医療業界が経済的にも大打撃を受けるわけです。

朝食とは直接関係ありませんが、「一日30品目」なんて言葉も2000年に飛び出してきました。なにが起こったかというと「サプリメント」なるものが普及し始めました。

前置きが長くなってしまいましたが、ここまでくれば何故、「朝食をしっかり摂りなさい」と言われるか、皆さんにはおぼろげ乍ら頭に何か浮かんできますよね。

英語で説明するのはとても簡単です。もともと、「朝食」などという単語は無かったのです。夕食を食べてから次の昼食を食べるまでの間に「食え」と言われてできた言葉が「朝食・breakfast」です。これはbreakとfastの合成語です。意味は「断食を破る」という意味になります。

今日はここまで。

「人相とその性質」前編

連載　大本こぼれ話

「神の国」大正15年2月
特任宣伝使　松永孝司

聖師曰く、「人の面貌は心の索引であって、人の性格と経歴の説明図である」つんと尖った節（ふし）のある鼻は、攻撃性をあらわす。かかる鼻の持ち主は、人と衝突しやすく、とかく我意を通さんとする傾きがある。鼻の先が平らたくて、尖っているものは、鼻柱が強くて猪突する傾向があるが、全く行きつまってしまう。曲がり鼻の持ち主は、親分になりたい、頭になりたいと、とかく人の上になりたがる傾向があるが、先が曲がって引っ込んでいるので、全くだめだ。ユダヤ人の鼻がそれである。鼻としては、小鼻が大きいのが、良い鼻である。

耳は後頭にぴったりくっついたのがよい。これは天に聞く耳といって、一番良い耳である。耳の色が、顔の色より白い人は、天下に名を顕わす人である。立っている耳はよくない。人のことに聞き耳たてる人で、立ち聞きなんかしたがる傾向がある。耳の上の方が立って、かぶりかかるようになっているのは、いちばん悪い。天をふさいでいるのだから、神さまのことなど聞かしても、こういう耳の持ち主には、ほとんどわからぬものである。耳朶（みみたぶ）のふくれているのは福相である。

唇の厚きは淫欲の深きことを示し、薄きはおしゃべり、への字なりに下に向かって曲がっているのは、根性の悪いのを示す。上唇の出たのはちょかな性質であって、下唇が出たのは意地悪の相である。口は小さくて口腔の広く、大きいのが良い。口が大きくても、口腔が大きく広くさえあればよいのである。**つづく**